

田植えから活着期の水管理

■ 除草剤の散布は適宜に、水管理は適切に ■

1. 除草剤散布 □ 圃場条件を確認しながら散布 □



条間に生えたヒエ

ノビエ等の雑草は代かき終了後から活動し、代かき～田植えの期間も高温で推移するため、成長も早くなっています。

近年は、田植えと同時に散布できる（移植時登録のある）除草剤もありますので、除草剤それぞれの使用時期を確認し、散布適期を逃さず散布しましょう。

■ 除草剤散布時は、田面の高いところが隠れるくらいまでたっぷり水を張る。

■ 除草剤散布後5日～7日程度は、湛水状態を保持する。

■ 効果が高いからといって同一薬剤（同系統）の薬剤を連用しない。（抵抗性雑草対策）

2. 水管理 □ 活着後は浅水管理 □



活着したイネ

田植え直後、苗が活着するまでは、苗の葉先が少し見えるくらいの深水（3～4 cm）を維持し、苗を保護しましょう。

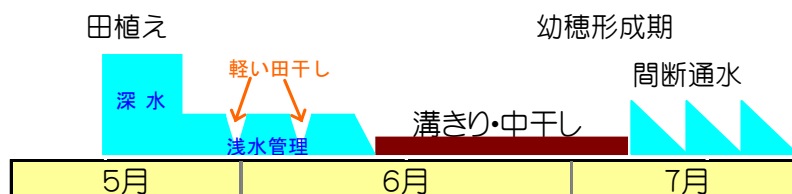
新しい葉が出始めたら、活着し始めているので、2～3 cm程度の浅水管理で水温、地温の上昇を図り、分けつの発生を促進し、莖数確保に努めましょう。

3. 田干し □ 葉色が出ない圃場は、好天日に落水して軽く田干し □

この時期、基肥をしっかり入れたはずなのに、葉の色が薄い、葉先が黄色くなっているなどの要因として、土の中にガスが溜まって根の伸長が阻害されていることが考えられます。葉色が淡いからといって、むやみに追肥をせず、軽く田干し（1～2日間落水）を実施しましょう。地表から水が無くなるとガスが抜け、根には酸素が補給されて、根は地中深く伸びるようになります。

活着後の深水管理は、田水温の上昇が遅く分けつが遅れ、軟弱徒長を招きます。コシヒカリは6月中旬まで浅水管理とし、水の入れ替えや軽い田干しで根に酸素を与えましょう。

■ 水管理の目安



溝きり 中干しで健全な稲体を

■ 目標茎数の7~8割、7.5~8葉期を目安に ■

1. 溝きり □ 中干し前に必ず実施 □



中干しを効果的に行うためには、溝の設置は不可欠です。溝きりは中干し以降の入排水管理を速やかに行うためにも有効です。そこで、遅くとも中干し前には溝きりを行い、圃場内の円滑な排水に努めましょう。具体的には目標茎数の7~8割（コシヒカリ：移植茎数16本/株、直播茎数100本/m）が確保された時点から落水を開始し、土の表面が固まってきたら2.5m~3m（8条~10条）間隔で溝きりを行いましょう。

2. 中干し □ 田植え後25日~30日が開始目安 □



中干しとは、土壌を還元状態から酸化状態に切り替えるため、土壌と大気を遮断している水を一旦乾かすことで、ガスの除去、根の活力を高め、また地力窒素の供給を抑制して過剰分げつを防ぎ、さらには土を硬くして刈り取りなどの作業性を高めることを目的としています。

中干しが不十分になると、茎数・籾数過剰となり、倒伏や白未熟粒の発生に繋がります。又、根張りが劣り、地面が柔らかいまま登熟期となった上、収穫作業のために早期落水し、登熟後半に稲体の活力低下を招くこととなります。



中干しは田面に小さな亀裂が入り、軽く足跡がつく程度までしっかり干し上げましょう。

稲が大柄になりやすい平坦地では早め・強めの中干しを心がけましょう。

極端に強すぎる中干しは漏水が多くなるなど、今後の水管理に悪影響を与えるので控えてください。

3. 病害対策 □ 箱施薬を散布しなかった方へ □



この時期、高温多湿になるため、いもち病にかかりやすくなります。

苗箱施用いもち予防薬（嵐プリンス粒剤）を使用していない移植の場合や、直播の場合は、6月10日頃までに予防としてオリゼメート粒剤やイモチエース粒剤を散布してください。また、補植用の置き苗はいもち病が発生しやすく、葉いもちの伝染源となります。土中に埋めるなどして圃場から除去しましょう。